



エーリアン 殺人事件

栗本 薫



エーリアン殺人事件

栗本薫



昭和五十六年六月五日 初版発行
昭和五十六年七月二十五日 再版発行

発行者 角川春樹

発行所 角川書店

東京都千代田区富士見二丁目十三
〈電〉〇三(二六五)七一一大代表
〈振〉東京三一九五二〇八(郵)一〇二

大日本印刷・宮田製本

Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします

0093-872308-0946(0)

目次

重々しいプロローグ	五
第一章	八
第二章	三七
第三章	六八
第四章	九
第五章	三二
第六章	一五
第七章	一九
第八章	三五
第九章	五三
史上最大のご都合主義のエピローグ	六六

装丁・插画
大竹雄介

エーリアン殺人事件

重々しいプロローグ

そこは……

はるかな、暗黒の宇宙の涯^はであつた。

ありとある宇宙船会社の航路のどれからも、ずっと遠くへだたっているために、そのあたりを訪れるものとてもいない。

いや——そこに、そのような星がある、ということさえも、人々はほとんど知つてさえいなかったかもしれない。

それは、暗い星であつた。

その星がまわっているのは、すでにずっと昔に死滅しかけている太陽のまわりであつた。

その恒星は惑星をひとつしか持つていなかった——小さくて、冷えかけた、淋^{さび}しい星であつた。

もし、その星に近づいてみよう、などという酔狂を、万が一にもおこしたものがいたとしても、程なくスクリーンにうつし出される荒涼たる岩々と断崖^{だんがい}、生きものの影とても見出し得ない、峨^が峨^がたる風景と、それを照らす、かすかな冷ややかな光、ときおり暗く雲のたれこめる空を切りさ

いて走るいはずま、という、世にも荒れはてた光景をみただけで、もはや一切の希望を絶たれ、そこでは何ものにも——生にも、自由にも、富にも、そして愛にも出会うことはできぬのだと知って、すすぐと引き返していったことだろう。

それほど、そこは淋しい、住む種族とでもない星だった。見すてられ、孤独で、さびれはてた——詳しい星図をひらいてみたものは、その星の名を見出して、さてこそ——とうなずいたかもしれない。

その星は——《地獄》^{ヘル}というのだった。

それは、凍^{ひや}てついて、希望のない星であつた——だが、そこに芽生えた種族も、文明の痕跡^{こんせき}もない、といったところで、それは、惑星《地獄》^{ヘル}がまったく無人の星であつた、ということではない。なぜなら、それは、まさしく、そこに住みついていたのでからだ。

住みついていて、という言いかたは適切でなかつたかもしれない。だが、それは、もうずっと長いことそこにいた。それは、ずっと待っていたのだ。

何を待っているのか——それは、それ自らですら知つてはいなかつた。ただ、それは、じつとこの荒涼たる惑星に身をひそめて、その上を流れすぎてゆく、それだけは平等な長い長い時を、ひたすらやりすごしていたのである。

寄せては返し、寄せては返し——返しては寄せる波——にも似た、時の流れが、この永劫^{えいせき}に凍てついた、うすあかりのさしこむ黙示録^{もくしよく}の世界をすぎていった。それは退屈^{たいくつ}することもなく、餓^うえることも、老いることもなかつた。ただひたすら、それは待ちつづけた。

そして——それははてしない待機は、ついに、終わるときをむかえたのである。

東の空に、あつくたれこめた暗雲をつらぬいて、小さな赤い光が見えた。それははじめ一瞬だ

ったが、それからもう一度きらめき、もう一度うかび出——やがて、それは、空の一角にしつかりと位置しつづける赤い新星となった。

はじめ、それは何も気づかなかった。

何回めかの赤い閃光がみえたとき、なにか——通常のことばでいう知覚ではないもの——が、それに、何かを告げしらせた。

それはゆるやかに、きわめてゆるやかに、人間でいうならば半信半疑とでも、いった状態で——比喩的な意味ではあったが——首をもたげた。間違いない。

長い、永久につづくかと思われた待機は、とうとう終わったのだ——それは、喜んで、その長い孤独なすみかであった死の星を、その歓喜でみたしてしまった。

赤い光はいまや、いよいよ大きく、はつきりと近づいてくる。

それはおもむろにその星をはなれ、その赤い光にむかつてゆるやかに近づいていった……

第一章

1

例によつて、最初にそれに気がついたのは、人間さまでではなく、K—18だつた。

K—18は——移動車がついてゐる型の古いロボットで、発声器官はつけられてない——ついていたがあんまりしゃべりまくるので、気短かな土方副長（ひじま）がもぎとってしまったのだ。そのK—18は、ヒュヒュヒュ、キュルキュルキュル、グウオー、というような音をたてながら近づいてきて、しきりにぼくの注意をひこうと袖（そで）をひっぱり出した。

おかげで、ぼくは貴重な酒をこぼしてしまい、唸（うな）り声をあげた。

「なんだ、十八金！」

ぼくは腹立ちまぎれにわめきたてた。

「クズ鉄の分際（ぶんざい）で人間サマに指図（さしず）する気か？ 一体、何だつてんだ？」

K—18は、俄（にわか）かにピッチをあげて、グルグルグル、キューオー、ウーウー、というような音をやたらに立てはじめた。何を言いたいのかは、よくわかつていた。実をいうと、どういふわけかわからないが、ぼくはこのシーラカンス号の中でただひとり、K—18の言うことが全部わかつてし

まうのである。おかげでワッチ当直でないときまで、ロボットの通訳扱いをされて、おまけに、ことが通じるといふことは、もしかしたら、お前もロボットか——お前の父親か母親にロボットがいるんじゃないか？　なんて下らぬ疑いをかけられて——一体どうやったら、ロボットと人間の混血ができるというんだ——えらい迷惑である。

クルウォーウォー、ヴロップ、ヴロップ。

(ワタシ、十八金デナイ、ワタシ、K—18アル)

「よしよし、わかったわかった。だけどそんなこというけど、十八金ならお前のそのくず鉄の図体全部よりよっぽど高いよ」

ウーグルルル。

(ワタシ、十八金ナイ。二十四金ガイイ)

「何言ってるんだ。バカ」

K—18の赤さびた胴体をこづいてやって、ぼくはとびあがった。

「あいててて……」

つい、いつものくせで、K—18が鉄でできていることを忘れてしまうのである。

「それはそうと——一体何の用だったんだ。こんなとこまで、おれを探しに来て——まだ、おれの当直の時間じゃないだろ」

そうだ、それをすっかり忘れていた——といったげな音を、K—18はたてた。そして、カギ爪になつてゐる工作肢こうさくしをのばすなり、ぼくの腕をひつつかんだ。

こんどは、ぼくも用心しんしんしていた。すばやく、コップの中身をのどに流しこんでしまう。K—18は、ぼくの腕をぐいぐいひっぱり、どこかへ来てくれ、というらしい、ぶーんというモーターの

音をたてはじめた。

「イヤだよ」

ぼくは言った。

「何だか知らんが、面倒はごめんだ。誰か別のやつを呼んでやるから、そいつに言えば。誰がいい？ 艦長か？ 副長か？」

K-18は、非常にあわててバタバタした。

「どっちもイヤなのか。じゃ誰だい。一等宙航士か。オペレーターか、コックか、ドクターか、エンジニアか」

K-18は、ぐるぐる、エクソシストみたいに首——というか首に該当する胴体の上部——を三百六十度回転させつづけている。光電子レンズのひとつ目が、パチパチとまばたいた。

「どうしても、おれでなきゃいけない事情がなんかあんの、え？」

うん、うん、とあわただしく、嬉しそうにK-18がぼくをひっぱる。

「チェ——」

思わず、ぼくはうめいた。

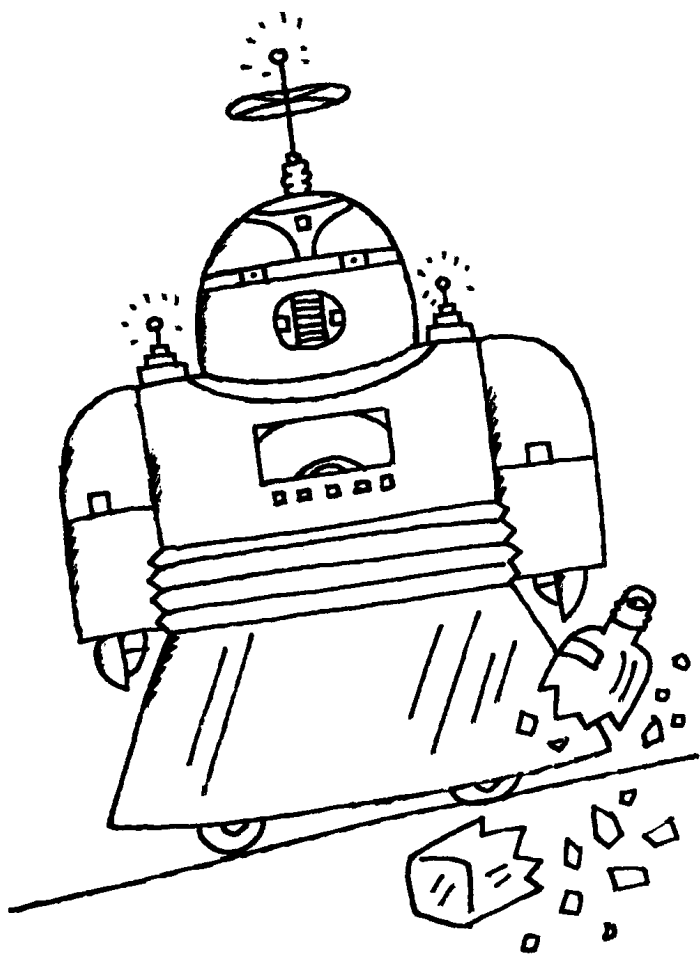
「ロボットの深情けか。——いいよ、いいよ、どうせいつだってぼくがいちばん貧乏くじをひくはめになるんだ。わかってますよ」

グルウオーウオー、ブルルル。

「ばかたれ。お前になぐさめてもらったって、しょうがねえや」

「なんだ、うるせえぞ！」

いきなり、でかい、太い声が頭の上からふってきたので、ぼくはとびあがった。



「そのガラクタの言うとおりにしてやって、早くそいつを黙らせろ、ルーク・ジョニーウォーカー！」

「へいへい」

ぼくは悲しく、ウイスキーの小びんをすばやくポケットにおしこみ、寝棚をおりにかかった。

「わかりましたよ、沖田さん」

「それから、仕事にゆくとぎぐらい、酒はおいてゆけ。きさまの息で、コンピュータが酔っ払っちまう」

「へい」

ぼくはしぶしぶポケットから、びんをとり出して、枕の下へおしこんだ。

「ぼくの留守に、飲まないでしょうね？」

「ばか。疑いの目で見えるな。おれの病気に酒は禁物なことぐらい、知ってるだろう」

どうだかわかるもんか——ぼくは口の中で悪態をつきながら、もそもそと、K-18にひっぱられてコンバートメントを出た。沖田宙航士ときたら、肺病やみの美青年パイロットを気取って、何かというと、ゴホゴホとせきこんだり、手を宙にかざして、

「ああ、こんなに細くなっちゃって……」

なぞとうつろにつぶやいていたりするが、なに、ぼくの見るところでは、沖田の病気はただの杉花粉アレルギーかブタクサ熱だ。なあにが、労咳——ただ、ぼくがふしぎでしようがないのは、一体、地球から何万年もはなれたこの巨大宇宙船シーラカンス号の、いったいどこに、そのブタクサか杉の花粉があったのだろう、ということである。もしかしたら、想像性アレルギーかもしれない。想像妊娠があるくらいだから、想像アレルギーだってあるだろう。

「沖田さんは、ぼくを苛めるのが趣味なんだよ」

エレベーターにとび乗りながら、ぼくはK-18に言っけさせた。

「かよわい後輩をいたぶって楽しんでるんだ。サディスティックな快感を覚えてるんだよ。もしかしたら、ぼくのことを、ひそかに愛してるのかもしれないね——あの人の目つきをみると、ときどきそんな気がすることもある」

ウールルル。ヴロップ。

「まあ、無理もないけどね——美しいってことが罪なんだから」

言っているうちにだんだんばかしくなってきた。ぼくは、グルグルと混乱したような音をたてているK-18につづいて、エレベーターをおり、走路にのっかって、当直室まで行つた。

当直室は誰もいなかった——まあ、完全自動操縦だし、いいようなものなんだが、それにしても怠慢そのものだ。ハル-九〇〇〇みたいに、コンピュータが反乱をおこそうと思つたらわけないね。どうするつもりなんだろう。

K-18は、目まいのするようなバターンをちかちかくりかえしているボードのところへいつて、これを見てくれ、というように、ぼくを見上げた。レーダーをのぞきこんで、ぼくはあつといつた。

「救難信号じゃないか。どうして、それをもっと早く言わないんだ」

K-18は、何かとがめるような、抗議するような音をあげる。もうそれにはかまわずに、ぼくはいそいで船長室にヴィジフオンをつないだ。

ジーコロコロ、とかすかな音をたてて、スクリーンに、シーラカンス号船長、近藤イサミ博士の顔が像を結んだ。

「なんだというのだ。ルーク・ジョニーウオーカー二等宙航士！」

近藤船長は、恐しく機嫌がわるかった。

「まだ、地球時間なら朝の三時だぞ。たいていのトラブルは自分の判断で処理しろ。わしは忙しい。わしは土方君としんみりと語りあっている最中だったのだ」

「しんみりって……×××を×ってでもいたんですか？」

ぼくは頭にきてわめき返してやった。

「ぼくだって酒びんとしんみり語りあっていたんですよ——しかも当直はぼくじゃないのに！」

「×××といえば、まあ、そうかもしれんな」

しれっとして、近藤船長は言った。

「わしと土方君の間には、一緒に上京して以来の——いや、幼いころに、近藤さん、トシ、と呼びあいつつ同じ道場に通ったところからの、余人にはうかがい知れぬ深い深いきずがある」

「そ、そんなエンガチヨな」

思わず反射的に、JUNE^{ジュネ}的ヒワイ・シーンを連想してしまったのがまずかった。ぼくは青ざめて、うずきをこらえようとした。

「エンガチヨとは何だ。おまえのような紅毛碧眼^{こうもうへきがん}のやからには、この崇高^{すうこう}さは理解できまい」

近藤は重々しくとりつくろって言った。

「それはそうと、何の用だ。早く言いなさい。私は最低十時間寝ないとお肌^{はだ}にわるいのだ」

「つ、つまり」

ぼくはむせた。